

6-3. その他

1. 防災マニュアル

01. 地方の現状に即したマニュアルの作成

また、北海道南西沖地震の経験を踏まえた、新しい防災マニュアルも、平成8年度には完成する予定である。「マニュアルというのは、作るとそれで安心してしまいがちなものです。しかも、現在あるマニュアルのほとんどは大都市型の災害を想定してのものばかりといっていいでしょう。奥尻町がいま作っているマニュアルはその点、あくまでも奥尻という特殊条件を想定したものになります」.[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3), p.164]

02. 奥尻町では大きな備蓄倉庫を造らずに、米の備蓄は米穀商に依頼する態勢を整えた。

「よく食糧の備蓄ということ、防災マニュアルでは力説するわけですが、奥尻のような小さな町ではそれはあまり重視する必要はないと思うです。(中略)町の中心部に大きな備蓄倉庫を作ったとして、じゃあ、その周辺の道路が通行不能になったらどうしますか？運び出すことさえできないんですよ。内容的にも米はあまり置いておくと虫がわくし、よく便利だといわれる乾パンも堅くて、そのままじゃお年寄りには不向きだといわざるをえません」そんなことから奥尻町では、北海道南西沖地震以後、米の備蓄は米穀商に依頼する体制を整えた。震災時には、町の各所に点在するお米屋さんが米の備蓄基地に早変わりするのである。米屋なら米は常に新しいものが用意されている。その米を震災時の非常用食糧として使ったら、その使った分だけを後で支払うというシステムを作り、すでに米屋とも契約しているのだ。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3), p.164]

03. 避難所生活に突入した後のことを重視するマニュアル作りが大切である。

「それから各家庭で役立つ防災マニュアルはもちろんですが、むしろ、避難所生活に突入した後にどうするかを重視したマニュアル作りも大切ですね」これは奥尻の震災ばかりでなく、阪神・淡路大震災でも露呈したように、被災者の精神的・肉体的破綻は、むしろ避難生活のなかで目立つ傾向にある。また、家庭での食糧備蓄ひとつを考えても、実際に役立つものがどういうものかはすでに明白である。たとえば食糧の素材としては缶詰類を中心に、さらに、小型のバーベキューセットがあれば、避難生活のなかにもバーベキューセットというカマドを中心にした団欒の場が設けられるし、燃料はガレキでも木の枝でも使える。場合によっては、それは暖房器具の代わりにもなるのである。実際、あの阪神・淡路大震災のおり、どんな救援物資を送ったらいいかと問い合わせてきた人に、小型のバーベキューセットをアドバイスし、喜ばれた経緯がある。なによりも温かい料理をみんなで作れば、精神的にも肉体的にも一時の安らぎを、辛い避難生活の中に

も得ることができるだろう。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3),p.164-165]

04.奥尻町では防災ハンドブックを作り、全町民に周知徹底を図った。

全地区を対象に、今回の災害の教訓を生かした地震・津波災害に対する避難計画を策定。その内容については、防災ハンドブックを作り、全町民に周知徹底を図った。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3),p.201]

2. 防災活動体制

01.奥尻町では防災活動体制を強化した。

避難計画の策定、避難施設整備の拡充とともに、防災関係機関との連携により、情報ネットワークの管理体制の充実を目指し、防災行政無線の戸別受信機などをフルに活用、防災体制の強化を図った。奥尻町では昭和55年という、道内でもかなり早い時期に防災行政無線を整備。町域全戸に受信機を配備し、日常のさまざまな情報提供のツールとしてのみならず、緊急時の情報伝達手段として活用してきた。しかし、北海道南西沖地震に際しては、中継局の流失や受信システムがアナログ方式だったことなどから、実用上多大な支障をきたしたという経緯がある。その点、今回設置したシステムは、デジタル式であることに加え、中継方法にも2重3重の防御システムがほどこされ、ほぼ完全とっていい防災無線システムが実現した。[『北海道南西沖地震奥尻町記録書』奥尻町(1996/3),p.202]